

月刊スキー雑誌にエッセイを書いている。連載で通算165話だ。無雪地の生涯スキーヤーの思いを綴っている。意外に全国に共感者が居て、それも老若男女様々で、褒められたり注意されたり、しきりに郵便やメール、結構生き甲斐を感じたりしている。

今月は「起て！指導員」。エラそうにヘンに先輩ぶってるかなと思わなくもないが、目下大低迷中のスキー界、見るに堪えないのでね。

若い指導員諸君に「起て！」と言うからには、先輩のシニアの諸先生方にも申し上げるべきであろう。言葉の無礼僭越の段は、直言第一の海辺の暮らし、すっかり馴染んだふだん言葉、この流儀で通用しているせいで、これは予めご容赦の程を。

S A Jには強化部と教育部があって、前者は文字通りの選手強化一筋、後者は一般スキー普及のための諸行事に取り組むということになっている。この両者の関係は車の両輪、ともにスムーズに機能してこそS A Jが安泰なのだ、長い役員生活中聞かされてきた。

少し古い話だが、札幌オリンピックの時、若年の現役役員だった私は丸っきり“獵師森を見ず”状態で雑用に忙殺される毎日。その代わり開会式には観客席のど真ん中の役員席に座らしてくれた。冬季種目の各競技役員は、式場の最前列に陣取った。それは会場を一周する巨大な制服の輪になった。スキーはその巨大な輪の4分の3を占めた。残る4分の1のなかの4分の3がスケート陣だった。そして更にその残り、つまり4分の1のそのまた4分の1がボブスレー、リュージュ、バイヤスロンなどの居場所だった。とりもなおさずこの現状が冬季オリンピック各種目の勢力配分比なのだ、と悟った。これはスキーが大責任であることを示していた。だからスキーは何が何でもオリンピックで日の丸を挙げなければならなかった。

幸いこの時はジャンプ陣の活躍、笠谷、青地、金野の金、銀、銅のトリプルの独占の快挙で、日本国中が湧いた。マスメディアの視線が一斉にスキーに向いてきたのはこの頃からだ。やがて一般スキーにもその余波がきて、「私をスキーに連れてって」のスキープーム時代となり、ついには「ジャパン・アズ・ナンバーワン」とヨーロッパスキー界を感嘆させるほどの日本一般スキー界大繁栄時代の到来を迎える。

一般スキーとはどんな分野なのか。一般にはスキー理論の研究者を目指すわけではなく、スキーで金儲けしようってわけでもなく、ただただ趣味の世界、冬になると雪の大自然に憧れ、雪山を滑りまくることに無上の喜びを感じ、雪国に通い詰める人たちが主力なのであろう。もっと気軽に温泉場での遊びの一つとして、ゲレンデへ出てレンタル・スキーを借りるレジャー客も含まれる。これらの膨大なスキー人口が、ある意味でスキー界を支える経済効果も持つのだ。

一方雪国にもスキーに没頭し、「スキー命」を張る人たちが居る。なかには我流独善手におえぬ古老も居るが、都会の一般

スキーヤーから「これぞ本物」の評価で畏敬されている人も居る。

当時S A J教育部には指導員50人に1人という割で技術員という制度があった。この人たち“我こそは専門家の意識が濃厚、会を重ねる度に理屈っぽくなって、教育部は競技スキーの基礎部門であるなどと言いだめた。つまりわれわれは漫然と雪滑りをして遊んでるのではなく、競技スキーの基礎を研究しているのだよ、というわけだ。つまりスキーの一番難しい基礎部門の学術的分野を担当しているのだ、と譲らぬ。オレは「ゲレンデのスキーヤーのみんなが国体選手を目指して頑張ってるわけじゃあるまいし」と反論したが、競技志向の強い雪国選出技術員の多数決で「基礎スキー」に決まってしまった。どうにも馴染まぬのでオレは依然として「一般スキー」と発言したが、その度「違う！基礎スキーだ。基礎スキーで意識統一した筈だ」と叱られる羽目になった。

「意識統一」なんて軍国主義的で嫌な言葉だねえ。

昭和55年北海道ルスツの第17回デモ選は「第1回全日本基礎スキー選手権大会」と名乗った。その第7回の青森県の大鰐大会では今までのすべてを通算して「第21回全日本基礎スキー選手権大会」と改称。オレは基礎スキーなんてバカげた呼び名だなアとの思いを捨てられずに居たが、なんとこの「基礎スキー」はポールに弱い学生スキーヤーにバカ受けして、もはや完全に市民権を獲得してしまった。「全国女子大・基礎スキー選手権大会」などは大人気で、多くのギャラリーを集めた。大会が近くなると、各地ゲレンデにはこの集団演技の練習とて、ド派手なユニフォームの女子大生チームがゲレンデ狭しとばかりに「ハイ・ハイ」の掛け声で集団大回り演技などを練習してたのもゲレンデの風物詩の一つだった。

「昔はスキー漬けだったのよ」という奥さんたちと話していて、うっかり「一般スキー」など口走ろうものなら「ちょっとオ！それ基礎スキーのことですよ、アタシ女子大では基礎スキーの選手だったんだからア」などとやられる。

ちなみにその基礎スキー選手権大会は、昭和62年の八方で「全日本技術選手権大会」と角張った名前に変わった。「技術選手権なんてトコヤの全国大会みたいだな」とクスッと笑ったが、「基礎」よりはマシだし選手のレベルも上がってきたことだから、格調高くていいかもな」と思い直した。

トタンにS A Jスキー教程が日本スキー教程と変わり、やたらに難しい用語を使う学術理論書のようになった。簡単に言えば済む話をわざわざ難しく解説している観があった。

しかしこれは雪国の実直な指導員の向学心を揺さぶったようで、大きな非難には至らなかった。しかしふだんは畑を耕している雪国の地元指導員が一斉に漢語を使い始めたのには参った。「スキーの上に真っ直ぐに立って」で済むことを「直滑降に際しては、スキーの上に直立した姿勢を構築して」などと研修丸暗記の異様な漢語でスキーを教えていた。

こんな姿を見るにつけ「スキー学校はもう終わりだな」と感じたのはオレだけだろうか。

イライラが治まらない。昨今のスキー界の落ち目があまりに情けない。社会の不況が背景にあることなんぞ分かりきっているが、この一般スキー界特にひど過ぎはしないかい。スキーバスだって？ そんなもの有りはしないよ。いくら計画して客を募集したって、いつも定員割れで赤字続き。こりゃダメだってんで止めちまったのさ。あれほど盛んだった都会のスキークラブのスクール？ 全滅状態に近いんじゃないか。

今クラブのスクール委員やったら難儀の極みだぜ。昔はガリ版のチラシ作ってスキーショップの入り口に積んどくだけで良かったんだ。締め切り日を待たず満員お断りだったよ。今はどうだい。スクール計画は日程決めるまで鳩首会議の連続。金、土、日や土、日、月など到底無理無理。結局3連休に集中するがそれもスキー3日間では疲れて勤めに影響しますからなどのヘナチョコ相手。毎日がキャンセルと申し込みの繰り返し。参加予定人員は出発日まで出たり入ったり、拳句の果てのドタキャンなど悪びれもせず。決行前日「この大赤字をどうするのよ」と定番の鳩首吐息の有様。

スキー場の民宿だって同じだよ。連日予約の電話は重なり合っただけの3連休。3連休だけはやっと部屋が塞がったと思えば人数は毎日増えたり減ったり。もちろんドタキャンなど屁の河童。利用は3連休なのに2日だけだね。疲れて勤めに出れば上司に二らまれる。だから3連休というのは2日間のこと。折角の土日の休みは土曜日だけのこと。日曜日の午後にはスキー場ガラガラってのは今は常識。昔は会社サボって平日スキーなんてのはいい身分の象徴だったけど、今はたちまちリストラ対象。

指導員の研修会だって同じこと。資格維持には義務づけられてるけど「研修」の名を理解してくれるのは役所関係だけ。民間企業では軽く「何じゃそりゃ」。だから3日4日の研修なんて到底無理。出席者は役所関係ばかりだから、会議はとかく理屈先行。理屈じゃないよ技術だよ。

検定も同じかと思えば都会地は意外と現状維持。「何でも資格」ってのは昨今の風潮だし、検定をこの一番天下の一大事とて早くから身構えるからだろうな。雪国では準指志望なんて減少一方だそう。そんなもの取ったって、メシが食えるのかよの現実が先行するからかね。問題は全国的に、2級が激減。これでは後が続かないよ、先行きが思いやられるねえ。

プロスキーヤーの三浦雄一郎見ろったって、あの人は何十万人に一人の努力と幸運の人。スキーのプロ名乗って冬の100日精勤したとて1日1万なら100万、これじゃ家族養っていけない。スキーうまいからってテレビがCM頼みに来たなんて話、ついぞ聞いたことも無いね。野球、サッカー、テニスなど。プロになりゃ食える見本だね。有名人になるし、何億の収入もある。これは劇場(ドーム)収入が基盤にあり、その中の人気がマスメディアに乗り、マスメディアがまた煽ってますます人気沸騰、押しも押されぬ天下の有名人に、という寸法だ。でもそれ世界レベルでなくっちゃね。世界で勝てるという見込みが必要なんだ。そんなプロスポーツとは違うけれど、近頃人気なのは女子マラソン。金メダルの高橋尚子は日本国中を酔わせている有名人で高収入。頑迷な組織と争って自立の道を拓いた有森裕子は偉いと思うね。だから女子マラソンには世界に

出せる後進がうようよしている。

ショボクれている先輩ばかりというスポーツに、見込みのある後進がわいわい集まってくるなんてことはないんだね。

S A Jもガチガチのアマチュアリズムに呪縛された時代が長かった。オレの経験の中にも「何ッ！ スキーを教えて金を取るッ。不届き者めがッ」と理事がドナって居た時代があった。いや、まだその余韻を引きずっている老名士も生きているがね。

ハンネス・シュナイダーの名を知らぬ人は少なからう。個人的に巨費を工面して、世界一流の大先生シュナイダーを日本に呼んだのは私立玉川学園園長の小原国芳だ。この時S A Jに国内行事の後援を申し出たが、あれはプロだからと冷たくそっぽを向かれた。

しかしシュナイダーは日本の一般社会から歓呼の声で迎えられ、スキー界に大影響を残し、近代日本一般スキーの祖になった。そっぽを向いた当時の連盟の当事者は、なんと恥ずかしいことだろう。

一般スキーの栄枯盛衰は日本という国の社会生活と絡らんで大きな意義を持っている。「スキーは雪国の歴史や生活様式を塗り変えた」という表現は決して間違っていない。

明治44年のレルヒ少佐の来日と、迎えた高田13師団長岡外史將軍のあのすばらしい対応によって日本のスキーは発祥した。乃木希典將軍は「スキーは実用になり、スケートよりもはるかに効用の広い、すばらしい雪国スポーツである」と讃えた。

誇りある、冬のスポーツの王様。いつまでも縮んでいていいものか。今だからこそいいことがたくさんある。安い。交通が楽だ。リフトに並ばず乗れる、ゲレンデではわがもの顔だ。さあスキーに仲間を誘おう。

スキーはレベルが上がれば上がっただけ楽しみの大きさが増すことを知らせよう。

自分の後進を育てよう。クラブの集まりを盛んにしよう。昔の指導員たちは、そうやって仲間を増やした。いい時代の到来が、なんとなく近づいている。スキー界もそんな気配がある。さあ、今シーズンは張り切ろう。再起動のキキを押そう



筆者

金井 英一郎

エッセイスト

日本スキー指導者協会 顧問



